

続

徒然
つれづれ

東京・芦屋・大阪

桑野 巍

東京生まれで東京育ちという友人が大阪に転勤してきた。彼は“都落ち”と思ったそうだが、社命に従うことは当然と考え家族とともに大阪・豊中市に引っ越した。中学生の子息の転校手続きも済ませた。周囲から大阪弁が聞こえると何だか耳障りでアレルギー現象を起こし、妻子は「もう東京に帰ろうよ」と訴えるようになって一、二か月間彼を困らせたらしい。しかし彼は「まあまあ」といって家族をなだめた。

半年ぐらい経ったところで大阪生活にも慣れた。言葉以外では東京も大阪も変わらず、かえって大阪の方が人情味豊かで解放的、「住めば都、いい所ですよ」というようになった。東京に比べて見栄を張るところはないし、食べ物はうまいし、交通の便もよいし、関西には文化遺産は多いし、それなりに大阪住まいの良さを評価するようになった。

一年が過ぎたころには関西の地理にも明るくなり、突然「僕は芦屋に住みたくなった。プレステージが高いようだし、リッチな気分になるんじゃないかな」と言い出した。「それじゃあ芦屋に行ってみたら」と見学をすすめたら、彼は本気で芦屋を探訪した。現地を訪ねた彼は一戸建て住宅がケタ違いに高いことに気付いて「断念せざるを得ない」と芦屋族をあきらめることにした。

そこで架空的な“私流の芦屋物語”を話すことになってしまった。核心からそれるが、それは芦屋市役所に勤務している公務員の物語だ。この人は役所の要職、激職についていない。祖父の時代から芦屋の比較的便利な所に住んでいる。敷地約400坪、敷地内に車10数台が収容できる貸駐車場と小型賃貸マンションを所有している。家族は高齢の両親と自分たち夫婦、子供2人の計6人で収入は役所の給与のほか駐車場、賃貸マンション家賃などで、家計の心配はない。休日には大型外車でドライブそして外食、月3回ほどメンバーコースでゴルフを楽しむ。優雅そのものだ。

芦屋市民の多くがリッチだとは限らないが「羨ましいと思うだろう」と問うと、彼は「作り話がうまいですね。僕にもそんな職場と住宅を世話して下さいよ」とせがんできた。全くの空想話とわかりなが

ら彼は後日一家で再度芦屋の高級住宅地を散策したそう。大邸宅が並ぶ山の手を歩いてみて「どんな人が住んでいるのか」にぶつかったそうだが、彼は「僕らには少し騒々しい所の方が似つかっている」と庶民派に立ち戻った。

大阪暮らし3年、彼は東京に帰った。関西各地の文化的集積地を探訪し「楽しかった。できればもう一度大阪勤務がしたい。芦屋訪問はおまけみたいだったが勉強になった」と私信を書いてきた。彼の従順さに対して「関西には魅力があるだろう。またおいで」としたためたあと「俺は実は東京に住みたかった」と心情を吐露した。都心に一時間以内で行ける所に50坪超の宅地を求め、2階建の小住宅を建てて住みたかった。そんな願望もあって20年前の東京勤務の時、都区内を物色してみたが、高価でとても手が出なかった。一億円でも無理と知って断念せざるを得なかった。

いま東京圏は高層ビル建設の真っ最中だ。羨ましいとは思わないが、日本中の地域社会のことなどを寸分も考えず、東京だけが一人勝ちを誇り自惚れている。人が集まり情報が飛び交い、外資を含めた資金が裏表でかけ巡っている“怪物都市”の様相だ。東京に復帰した彼は「都心部で高級新築マンションを売り出しているが業者は売り値を明かさない。“高値入札”を待っているというずるいやり口、バブル再来？一度上京して実態をご覧あれ」と書いてきた。

首都圏と地方都市のバランスが大きく崩れつつあるのは仕方ないかも知れないが東京に「ここは定員オーバー」というイエローカードを誰が突きつけるのか。有限のエネルギー資源を浪費する半面、住民同士の支え合いが崩壊しつつある大都市の異常現象をどう見たらよいのか、にぶつかった。

それでは大阪圏はどうであろうか。芦屋居住を断念した彼は「大阪もバブル経済でしょうか」と聞いてきたが、その返事に私は、「大阪人はバブル都市東京を真似ない。大阪人には堅実さと才覚があるから」と書いておいた。

（自治大阪編集委員会顧問
時事通信社元大阪支社長）